

北アルプス登山隊報告

方面 烏帽子岳、槍岳、双六高原、上高地方面

期日 七月十一日より十七日まで

参加者 二A 瀬高(リター) 鈴木 二B 田牧

二C 梅野 一A 徳田・松浦 一D 市浦

日程

第一日 我等北アルプス登山隊一行七名は七月十一日夜

新宿の汽車で出發した。

第二日 信濃大町―葛温泉―濁小屋

甲府を過ぐる頃より雨が降り出し、早くも前途の多難を思はせる。下諏訪あたりで夜が明け、六時二十一分

松本に着き、信濃大町行の電車にのりかへた。七時半信濃大町に着いた。八時バスに乗つて葛温泉に向つた。

。途中高瀬川の流氷はものすくなく、濁流は渦を巻いて恐ろしき速さで流れてゐた。数月前からこちら一帯は荒

れてゐたのださうである。九時葛温泉に着いた。雨は依

然として降つてゐたが、雨衣を着て濁小屋に向つた。高

瀬川の流にそつて登つて行き、十一時頃濁小屋に着いた。

。雨は依然として止まないのい、時間は早いけいとも、

今日はこゝで一泊する事にした。夕方になると雨もやみ

、青空も雲間に見えた。溪流近く鳴くひひらしの聲は静

かに聞えた。(瀬高記)

第三日 濁小屋―鳥帽子小屋―鳥帽子岳往復

朝起きて見ると雪は来た。危い。時々山崩れ地響
か小屋にも伝付つて来る。朝食もすまして兎
角出発する事にした。高瀬川から割れて支流に
ついで進む。此處一帯付河原に小石がゴロゴロ
して所々に平堵造の橋に石が積み重ねてある。
いやな悪戯だ。あたりが閑静さと供に下り雷河
原を思ひ出させる。途中の細流に水筒に水をつ
める。普通通り右手に不動岳の急峻な斜も見
える筈。二向米垣から上げ雲に被けられ何も見
えない。標識に従つて鳥帽子登山に上り登る。

これから八軒の道程は北下ル。石代への急坂
に上る。折々折々ある。途中数回休んだ。眺望
が全然きかない。と来て居るから実に苦しい。
時々雨に合ふ。三角峠の所でゴッソルと紅茶を飲
み少しばかりパンを食へる。素敵に美味い。雨は
降られた。又出発する。此處から皆小屋へは
楽である。小屋下晝食を終へてリュックを置き鳥帽
子岳に白蛇登り人走の橋にして肩へ掛ける。実
に雄大に伸掛る橋に屹として居る。右へ巻いて
登り始めます。橋の登峰よりはるかにはスリルに

豊少興呼がある。稍風が強い。峰の背面より下降。
 此處は意外樂だ。歸路雲漢の上で發んで^{往後}一付
 肉少しで小屋へ着く。晩は日大子心わらう
 手料理ういふ力しに舌鼓を打つ。

第~~五~~四日

鳥帽子小屋一野口五郎岳一水晶小

屋一鷺羽乗越一双六高原

風如くなり強い。お妙が前には立山も富山平野
 斗は本海も見えよう様だ。しめしめとても綴子
 の揺る雲海の下に僅かに光る心けである。天氣

は決して良とはいへない。兎角今日中には三候運

華か其の先の雙天小屋へ行かふと云ふうと

ある。私はは時肉の觀念が余りない。今一寸

出発のは肉を思ひ出せぬ。尾根縦走らうと多

少がらうとして居ても左程困難ではない。か大

氣を心配しつつ出発した。尾根を歩きながら這

松の中を一條の白流を以て蛇行する。此の

縦走路は中々味な所がある。しめしめ肉に完

全に天氣が解れて来て風が強く吹く。うか

すと体が吹飛んでしまひそう。お妙が前

しばらくすると霧が尾根目かけて盤然と吹
き上つて来ふ。引叩く揺る雨も交じりし。わも前
面には越^たえられぬ。即ち濃霧
の中は浮んで居る。実に其のほろ我々の心中は
悲慘そのまゝであつた。そして十二はすぎ水晶
の小屋にひびき濡れになつて逃げ込んだ。
此處で他の同行者と火を燃やして暖を取り盡
食を食ふ。然るに
大氣は依然然と悪い。小屋には番人の屋^やりといふ雨か
源漏る。そこで嵐の相向を見て二時向役三候蓮華

に白小事にした。尾根は危険ぢやないか。鷲羽岳を左
に巻いて澤に降り小屋に建する。此處は谷はな
つて居る。うに園の影響はあまり受けない。
時刻は四時頃更に意を決して双六小屋に向ふ
事にした。穂高へ足を進め、連中にとつて松の
大氣を見える處に是非双六まが行きたい。又雨に
祟やた縁定を取煩す處に双六まがけと云ふ小西
天杯を擔いで歩む。たつてある。右平は三候蓮
華を右平に廻し途中二つの雪溪を越え緩るや
ゆる久しうを畫く。此の高原状の山腹は非常に

氣持 かもち かいしりし女心と山の空で私達は又々
 嵐 あらし 遭遇 そうごう 戦 いくさ を演 えん じられはならぬか一つは一行
 は此 こゝ 方 かた であら二つに命 いのち かけて終 はつ ひ連絡 れんらく の附 つ け
 探 たん 検 けん 白 しろ へく嵐 あらし の中 なか ともつ つ ぶ深 ふか と と なるて双 ふた 六 ろく 決 けつ 必 ひつ 屋 や
 12 達 たち した。先 まづ 着 き う三人 さんにん は $\frac{1}{2}$ フクを運 はこ ぶとすぐ又
 嵐 あらし の中 なか にも飛 と び出し後 のち の一行 いっけい と双 ふた 六 ろく の所 ところ で會
 して互 たがひ ひに無 む 事 じ を喜 よろこ び合 あ った。少 すこ くとも後 のち 三十
 分 ぶん 後 のち にならと思 おも ふと標 ひょう 然 ぜん となつた。おどろかすを得 え ない。

以
二
田牧
之

第五日 双六小屋に籠城

昨夜一晚中荒れた嵐は今朝になつても依然として止みさうもない。それひ今日は一日籠城と定める。しかし晝過ぎ頃になつて雨は止み、夕方になると風も止んで嵐はおさまつた。嵐の後のその夕方の双六高原を見渡せば鷲羽岳は鷲羽乗越の彼方にその秀麗な姿を聳やかし、赤岳、緑黄岳、緑黄岳一帯にかけて、夕日の餘光を染みて、その山はたは紫色に輝き、前面の縦澤岳の頂上には十一日の月が出て、双六岳の斜面にかかる雪溪の落つる所は双六池となり、るり色の水もたゞはしめてゐて、何もいへ

ぬ神秘的な莊嚴な光景であつた。時がたつにつれて、山はたは次第に紫色を増して、山は次第に暮れて行く。夜になつて再び小屋の外に出た。月は雲一つなき空に中天高く輝いてゐる。めづれる山々谷々には月光を浴びて明暗もはつきりとさびしく見える。山小屋の燈火は下の方にかすかにゆゑてゐる。月明らかなる山岳重疊せる中の高原の夜、それは何と崇高な静寂な感じを人に與へるものだらうか。高原は静かにあけて行つた。

第六日 双六高原―槍岳―梓川の溪谷―上高地

今日は嵐も全く過した心ゆくばかりの快晴である。七時
双六高原を出發した。樺澤岳を過す、槍岳へ向ふ西鎌尾
根にかかる。硫黄澤乗越あたりから槍岳まで、前面に聳
え立つ槍岳の雄姿を仰むながら、はるかに紫色の雲をた
たよはしてゐる乗鞍岳、焼岳方面を望みながら一歩一歩
槍岳に近づいて行く氣持はこの上なく雄大であつた。槍
の穂近も見えなくなる頃になると頂上も間近い。十一時
槍岳の肩の小屋に着いた。双六高原より四時間踏破し
たわけである。この烏帽子岳、槍岳縦走のコースは今夏
は僕等が初めてたさうで、一緒になつた十人の同行者に
先んじて、又烏帽子岳方面より槍岳へ一番乗をしたの
である。

穂高岳へ行く者は此所を一泊して、明日穂高を越える
のである。梅野君と鈴木君とだけが行くはすであつたか
、市浦君と松浦君も行きたいの事結局四人かといま
る事となつた。僕等三人は今日中に上高地まで下り、上
高地で一日キャンプするのをとり止め、明日中に豫定
通りに歸^{京する}事にした。晝食をすまし、穂高に行く者の家
に打つ電報をあづかり、リ―ターになる梅野君に自重を

望み一時出發した。槍岳の穂先は雲がかかつてゐるの
邊に頂上をきはめるのはあきらめた。岩のころくした
道を下る。殺生小屋を過ぎ、槍岳の雪溪にかかる。今
年は雪が少いのび樂に通過する事が出来た。大槍小屋を過
ぐるあたりから雪溪は梓川となつて流れてゐる。槍澤小
屋を過ぎ、徳沢小屋あたりまで、梓川は兩岸の白樺や山
毛櫸の林の間を靜かに流れてゐる。兩岸の樹木は折
からの夕日を浴びて輝き、豊かた溪谷美を形作つてゐた
。かくして思ふ存分梓川の情趣を味ひながら下り、夕
暮近き六時半頃上高地に近き明神池のはこりのはたこや
に着いた。かくして今度の山旅では天幕を持って行つた
けれども天候の都合等一日も張らないでしまつた。(し
かし自炊はした)その晩は梓川の溪流の音を聞きながら
、嵐をつかれた体をやすめて、ぐっすり寝た。

第七日 今日は徳本峠を越えて島々まで六里の道を歩く
豫定であつたが、とりやめにして島々までバスに乗つ
て行く事にした。宿屋でゆつくりして九時頃出發した。
三十分ばかり梓川にそつて歩き、上高地に着いた。河童
橋から上流を見た眺は寫眞以上であつた。家へ電報を打